

ペトルス・レグー社の日本向け輸出製品

—19世紀オランダ・マーストリヒト陶器の一側面—

長久 智子

1. プリントウェアと日本

本稿は幕末から明治にかけてオランダ商人経由で日本へ流入してきたヨーロッパ製銅版転写陶器（プリントウェア Print ware / Transfer-printed ware とも）のうち、特にオランダ・マーストリヒトのペトルス・レグー Petrus Regout 社の日本向けとみられる製品について考察する。日本に伝世しているヨーロッパ製プリントウェアにはイギリス製とオランダ製があり、器形は皿や碗、鉢から、スープを入れるテュリーン Tureen という蓋物（レードル Ladle という柄杓の付属するものもある）、肉や魚を盛り付けるプラター Platter といったものまでヨーロッパ食器のさまざまなモデルがある。ところが、本稿で採り上げるレグー社のプリントウェアの中には一見してヨーロッパ食器とは異なるモデルがみられるのである。酒徳利、猪口、茶碗蒸碗といった和食器そっくりのこれらのモデルは何を示しているのか。

日本は17世紀以降、ヨーロッパとの交流を長崎・出島のオランダ商館に限定した。200年ほどの間、オランダ（オランダ東インド会社）だけが日本とヨーロッパを結ぶ唯一の商業ラインとして機能していたのである。ゆえに、出島から少しずつ商館員の私物や脇荷として外へ流れてくるヨーロッパ陶磁は製作地にかかわらず「阿蘭陀焼(おらんだやき)」と呼ばれ、大切にされた。さらには人脈をたどってオランダ商館員に個人的な製作・購入を依頼するものもいたのである。こうした先例を踏まえて、レグー社の和食器風モデルも同じく日本からの注文制作によるとするものもある¹。しかし、デルフト窯（あるいはその周辺）へ直接注文制作が可能であった17世紀と違って、プリントウェアが運ばれてきた19世紀は大量生産の時代であった。イギリスで生み出されたプリントウェアはまさしく産業革命の落とし子たる工業製品なのである。日本からの、しかも個人の注文による製作という可能性は極めて低いといわざるを得ない。

日本国内に残るヨーロッパ製プリントウェアの研究はまだ発展途上の分野である。なかで、ヨーロッパ製プリントウェア、長崎・出島を中心とする日本での出土・伝世作例の報告、日

本での受容については岡泰正氏による先行研究が嚆矢であり、かつ重要である。プリントウェアが「阿蘭陀写（おらんだうつし、別名：京阿蘭陀）」とよばれる一連の日本製藍絵西洋風陶器群を作るきっかけになっている可能性を指摘し、プリントウェア研究の意義を明らかにした。また、岡氏は海外のプリントウェアに関する論文を翻訳し、イギリス・オランダ製プリントウェアの基礎的な情報を紹介している。一方、プリントウェアは海外ではアンティーク・コレクションの分野であり、イギリス製プリントウェアについては一般向け解説書もあるが、オランダ・マーストリヒト製プリントウェアについては非常に乏しいといわざるを得ない。結論としてヨーロッパ製プリントウェア資料を国内で入手することはほとんど困難であるにもかかわらず、日本における外来文化の受容という論点での研究の必要性はむしろ高まっている。本稿のテーマであるレグー社の日本向け製品もその意味で重要である。

そこで本稿ではオランダにおけるマーストリヒト陶器研究の第一人者 Marie-Rose BOGAERS 氏の論文 “ ‘IK HAD DEN MOED…’ De Maastrichtse aardewerkfabrikant Petrus Regout en de export van zijn zogenaamde ‘Engels’ aardewerk naar Japan ”, *Antiek no. 7*, pp. 327-343, Lochem, The Netherlands, 1992 中から特にレグー社の日本向け製品について考察した箇所を抄訳し、ここに新資料として紹介する。

2. 「私は勇敢だった…」 マーストリヒトの陶器会社ペトルス・レグーと日本向け “イギリス製” 陶器 の輸出」 Marie-Rose BOGAERS

“レグー社の製品海外輸出” pp. 333-334

ペトルス・レグー社だけではなくマーストリヒトのほかの製陶会社やデルフトの製陶会社ピッカールなどにとって、製品の海外輸出、特に自国オランダの植民地への輸出は非常に関心あることだった。最初の製品を出した年²にレグー社は貿易会社とコンタクトをとっている。レグー社は 1840 年頃はオランダ領東インド³から定期的な注文を受けていたが、次第に他の国々への輸出をも考え始める。レグー社では早くからアジアに着目し、成功するにはその土地の好みにあった製品を生産する必要を感じていた。であるから、1847 年には中国・広東省の商人に、商品サンプルとして「スペイン製の敷物を 10 枚くらいと、一番好まれている中国製陶器」を頼んでいる。この中国製陶器とはインドネシアへ輸出されていた中国製磁器のことで、興味深いことに現地の好みに応じて胎が厚い。インドネシア市場向けのレグー社製品は 1750-1850 年頃の中国青花磁器をまったくコピーした “Paddyhalm” や “Sado” といったパ

ターンだった。レグー社はインドネシア諸島市場向けに特化したパターンや用途の製品を輸出していた⁴。米を食べるための食器には、特定のスープ皿が適用された。順調に製品を輸出していたレグー社は日本市場向けにも特別な製品を投入することにした。こうしたことはレグー社の歴史の初期のデザインに関する出来事で、輸出用製品はスタンダードな種類（アソートメント）とは区別されていた。

“日本” pp. 334-335

イギリス製の最新式の機械類を導入した 1851 年以降、レグー社は国際市場で競争できるレベルの製品を製造できるようになった。新しい販売代理店を日本に設置するためにレグー⁵は精力的に活動する。日本が開国した 1854 年より後、1861 年彼は手紙に「政府と交渉する突破口を探した、」としたためている。「私は」と彼は続ける、「勇敢だった。積荷を、それもわがレグー社製品を満載した船 2 隻[ママ]を日本へ送りこむ勇気があったのだ」。1859 年、レグー社は日本へ商船を送っていた。さかのぼること 1641 年から長崎の人工島・出島の商館でのみオランダは貿易を許されていたが、1858 年には許可を得た企業も日本と交渉できるようになった。レグー社はさっそくその恩恵にあずかったのである。レグー社が関与した日本への最初の貿易商船団は 3 隻の船で構成されていた。レグー社のキャプテン・D 氏のもと、バタヴィア経由で出島へ航行する許可が与えられた。アムステルダム港からは 1859 年の“気候よろしき” 3 月、キャプテン・D 氏の指揮する A. R. Falk 号が出航した。バタヴィアで Joan 号と合流、そしてレグー社製品を積んでロンドンを出航した Inkerman 号と最終的に合流した。それらにはレグー社の製品⁶—ガラス製品、陶器の箱に加えてアムステルダムで仕入れた日本向け商品が積まれていた、例えばダイヤモンド・カッター、定規、銃、手斧が 11 箱、ナイフが 47 箱といった具合に。特に高価なものは 60 箱の時計—単価 17 フローリン—、35 ダースのダイヤモンド、10 ダースのケース、半ダースの単眼顕微鏡とケースだった。それからオラニエ王家の肖像画がいくつか、旗とポールとともに積まれていた。そしてこれは確かなことだがレグーは宣教師のたぐいは望んでいなかった。ほかに、さまざまな色とサイズの手袋、双眼鏡、耳栓、“ブロウ・ジョブ” の類、それから上絵付磁器製目覚まし時計というようなものもあった。さらに、こまごまとした箱入りの小物類—ヘアピン、縫い針、剃刀、そして多数の酒類があった。しかしレグーはこれらが日本向け商品として適していると確証があるのか分からないと考えていた。

“レグー社の日本向け陶器” pp. 340-341

日本市場向けのレグー社製品の質の高さには驚くばかりである。これらは 19 世紀の第 4

四半期に製造されていたものである。レグー社の製品はオランダ商人が住んでいた九州の長崎や平戸で主に発見されることから、これらの製品は彼らの日常品であったのだろうと Ailion 氏⁷は推測している。皿やボウルといった一般的なモデルは日本人・オランダ人どちらの食生活にも合致していた。日本での古くからの作法で、これらのマーストリヒト陶器は種類ごとに、またはセットにされて大切に箱に入れられ、ラベルを付けられて保管された。困窮した場合、または時代遅れになった場合にはそれら“がらくた”は捨てられるか、外へ流出していったのである。(後略)

“器形とパターン” pp. 341-342

レグー社が特に日本市場向けとして意識していたものがある。その最たるものが酒徳利である。これらにはちょうど釣り合う小さなボウル(猪口)がある。ボトルは一对になるのが、日本の伝統である。薄い口造りと注ぎ口のついた形状は、ワインボトルのしずく切りと同じである。Ailion 氏によると、陶器の品質が良いので日本の伝統にそってワイン⁸を入れたまま湯で加熱することも可能だったのだという。また、日本ならではの蓋付容器がある。これらはいくつかの知られざるモデルを組み合わせて作られている。それらのボウルは高台が通常モデルより半分ほど高く作られている。またボウル口縁部の内側へ蓋をはめるために、多くのボウルは内側にエッジがない。これらのモデルの腰が日本のやきものの基準より高いのは中国の影響だろうと Ailion 氏はいう。また、酢の物を入れる皿に転用された蓋について、通常の蓋より反りが少ないことから、より小皿のように見え、また日本のやきものの蓋にはない形だと Ailion 氏は述べている。“どんぶり”という器は鶏肉と卵を米と混ぜた料理に使われたもの。このボウルのサイズはイスラム陶器の完全な模倣だという。蓋付の容器はさらに“茶碗蒸”用のものがある。また、“湯呑”と呼ばれる日本のティーカップ、“小皿”と呼ばれる小さな皿、ケーキ皿、ティーポットなど様々な種類が日本へ輸出された。Ailion 氏のコレクションには、東洋モチーフと西洋モチーフ、両方のパターンをみることができる。“Willow”、“Ceres”、“Pompeia”、“Portici”、“Honc”、“Mandrin”、“Terror”といったパターンは日本にもありうる風物である。対して、典型的なイギリスのジャンル—想像上の風景、“Gleaner”、“Miller”、“Swiss Fountain”といったものは日本にぴったりだとレグー社では思っていた。“Olympia”のような古代ギリシャの寺院や人物を描いたパターンでさえ日本に向いていると考えていた。面白いことに、ヨーロッパの風物は好んで酒徳利に用いられている。おそらく、日本風な器と西洋の風景図のコンビネーションが日本人顧客に好まれると考えたのだろう。ひとつの器の中に2つの違うパターンを入れることは、レグー社では珍しい⁹。Ailion 氏のコレクションにある、たくさんの蓋、皿は表面・裏面両方にパターンが入っ

ている。こういった両面印刷はレグー窯ならではのものである。日本市場向けの主要なセットはブルーのプリントで、ほかに赤、緑、紫のプリントもあった。まれに、プリントした上に、釉の上から緑や青、茶色、薄茶、ピンクなどで絵付けをしたものもある。こうした上絵付けのスタイルは清朝陶磁の Famille Rose や日本の伊万里を真似ている。金彩を施すものも日本向け製品中にある。Ailion 氏によると金彩が登場する時期は遅く、日本で好まれたものだという。しかし彼のこの説は今では否定されている、なぜならばわれわれはインドネシア市場向けの最上品の中に金彩製品があることを知っているからだ。インドネシア市場向け製品は金彩を緑や茶色のプリントと組み合わせることが好まれていた。一般的にみて、たとえすでに上絵付けを施して器面が密になりすぎているように施されているような金彩技法はインドネシア市場向けの輸出製品だといえる。レグー社は金彩製品が日本市場でも同様に受け入れられるだろうと誤った想定をしたのだろう。

“むすび” p. 342

レグー社は周到な用意をして日本市場の開拓に挑んだが、不本意な結果に終わってしまった。日本向け市場の調査などをするアドバイザーとうまくいかなかったことも、市場不活性の原因である。1859 年以降レグー社の新しい商船が日本へ向けて出航した様子はないし、アドバイザーと問題があった 1867 年にも日本との記録はない。最終的に 1882 年以降、輸出先リストに日本が載ることはなかった。しかしヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカといった市場で赤字になってもなお、日本市場は特殊な場所であった。いまひとつ、レグー社製品が日本に輸出された 1859 年頃へ戻ってみよう。現行モデルの売れ行きには太刀打ちできないとしても、この日本向け製品の一群には明らかに他のモデルとは違う雰囲気がある。当時レグー社が作ったこの輸出向けモデルは器胎も薄く、最高級品だった。特に酒徳利モデルはひじょうに個性的である。これは日本向けの風変わりなオランダ製品であり、そして 19 世紀の陶磁史における東西交流のすばらしい実例なのだ。

3. むすび

以上が、レグー社における日本市場開拓の試みと挫折である。結論をいうと、今現在われわれが目にする酒徳利[挿図 1]、蓋物(井)[挿図 2]といった和食器風のモデルは今まで考えられていたように日本からの特別注文ではなく、レグー社の輸出向け特別モデルだったことが明らかになった。

レグー社が市場リサーチに力を入れ、各市場の好みに合わせて製品を投入していた様子も見えてきた。とはいえ、日本向けに特別にデザインされていたかどうかは定かではない。おそらく現行のモデル—酒徳利の場合は、酢やオイルを入れる調味料入れなど—で日本向け製品に転用できそうなボトル、蓋として何らかの器を組み合わせれば日本向け製品になる碗や鉢などを選んでアレンジして売り込んだと考えられる。和食器モデルに東洋風物パターンではなくわざわざ西洋風物パターンを好んで貼っている点、それはオランダ人もまたこの東洋と西洋の不思議な取り合わせに面白さを感じていたのである。

謝辞

本稿に関連した愛知県陶磁資料館 2010 年度企画展「阿蘭陀焼：憧れのプリントウェア—海を渡ったヨーロッパ陶磁」では、神戸市立博物館・岡泰正氏に終始懇切なご教示を賜りました。また、オランダ在住の考古学者・金田明美氏にはアムステルダム、マーストリヒトと資料調査に同行して頂きました。本稿に紹介した Marie-Rose BOGAERS 氏の論文も氏よりご教示いただいたものです。末筆ながら御両名に深く感謝いたします。

主要参考文献

岡泰正「オランダ・マーストリヒトにおけるレグー陶器について—江戸時代後期のオランダ陶器受容に関する基礎資料—」『長崎出島の食文化』（財団法人親和銀行ふるさと振興基金、1993）

岡泰正「出島出土のヨーロッパ陶器をめぐって」『出島和蘭商館跡』（長崎市教育委員会、2008）ほか

Marie-Rose BOGAERS, *Drukdecors op Maastrichts aardewerk 1850-1900* (ANTIEK lochem, 1992)

Marie-Rose BOGAERS, “ ‘IK HAD DEN MOED…’ De Maastrichtse aardewerkfabrikant Petrus Regout en de export van zijn zogenaamde ‘Engels’ aardewerk naar Japan”, *Antiek no. 7*, pp. 327-343, Lochem, The Netherlands, 1992)

註

¹ 岡泰正「オランダ・マーストリヒトにおけるレグー陶器について—江戸時代後期のオランダ陶器受容に関する基礎資料—」『長崎出島の食文化』（財団法人親和銀行ふるさと振興基金、1993）

² 訳注：レグー社の創業は 1834 年。

³ 訳注：インドネシアを指す。

⁴ 訳注：ラスター彩を併用した“Goudkust”パターンが例として挙げられている。

⁵ 訳注：ペトルス・レグー。創業者ペトルス・レグーの息子。

⁶ 訳注：レグー社は陶器製造だけではなくガラス製品ほか様々なビジネスを展開していた。その中でもっとも有名になったのが陶器部門だったのである。

⁷ 訳注：Charlie Ailion 氏。日本で発見したマーストリヒト陶器のコレクションを持っていた。今、彼のコレクションはオランダ各地の美術館へ分散収集されている。

⁸ 訳注：日本酒のこと。爛のことをさしている。

⁹ 訳注：たとえば酒徳利のパターンは“Fishing Sports”と“Swing”の組み合わせがある。